

---

# Lace Edge

扇花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

L a c e   E d g e

### 【Nコード】

N 4 0 1 8 B A

### 【作者名】

扇花

### 【あらすじ】

真砂家次女、真砂三津の恋愛事情。

大変なシスコンです。お相手の利人さんはそれに年上。謎なお仕事の人ですが、腕っ節はかなり強いです。コンクリ壊しちゃうくらい。同僚に木内さんというやっぱり強面の人があります。

好きだけど、ぎりぎり上手く行っていない感じの二人の時々不思議な日常です。

一話完結方式。掌編群。

## 1・MIEL&CITRON

「なんでって、聞かなくても分かるけど。」

うふふ、

そう笑って千誉は三津を見た。目元の緩みは、全てお見通しだといっているようで、少しばかりいたたまれない。

「あたしの時、何でって聞かなかったでしょ？三津は。」

「……聞かなくても分かっちゃったから。」

歳で言えば3つほど離れている姉は、ほうらね、と、ストローを噛んだ。

姉と自分では、両親の対応が違う。けれど、千誉が愛情を知らずに育ったはずがないのだ。母などが顕著に嫌う水芝の家の百魚などは言葉を濁すけれども、三津は姉の宝物を知っていた。

白いアルバム。

彼女が家を出るまで、三津はその存在を知らなかった。姉妹揃って家をでて、やっと一息ついたときに教えてもらったのだ。

ぱきぱきと、古びた紙ならではの音を立てて開かれたページには、幸福の絵があった。

自分の知らない、真砂千誉。

家では見たことのない、幼い姿。

- - ああ、そうか、

その時やっと思心が行った。何故家にはひとつも千誉の成長記録

がないのかを。

- -このひとに、

『10さい トキさんと』

拙い文字で書かれた注釈に、涙が溢れた。姉は世界中の誰よりも幸福だったのだと。百魚にそうなのだろうと詰め寄ったならば、あのマッドサイエンティストは渋い顔で頷いた。

三津は鵠という男が羨ましくてたまらなくなった。誰かを一途に思うことの重さを姉に教えた人間は、柔和な表情とは裏腹に、とてもなく勘の鋭く、くせの強いひとだった。そして姉がいなければ身も世もなかったひとでもあった。だから先に逝ったのだろうと、三津は思う。残される千誉の事など何も考えず、唯唯、二人で幸福でありたかったと、それだけを望んだのだと思わせた。

身も世もない。

そんな風に、自分は彼に愛されているだろうか。

答えは否である。

「姉さんは、鵠さんじゃなくても幸せ？」

「トキさんの幸せと、柊一郎さんの幸せは、」

違うの。

からん、

氷が解ける。グラスをしたつる水滴が、姉の思い出のひとつびとつのように、胸が痛い。

「百魚も別の意味でトキさんの次に好き。」

「別の意味？」

「二人とも、似てるでしょ？」

トキさんに。

「百魚は分かるけど、あのこが？」

「似てるんだもの。」

ふく、と頬を膨らました彼女は、血のつながりの鼻肩目を抜きにしても、大層愛らしかった。きつと水芝鴉が植えつけた苗が、成長したものなのだろう。

- - ああ、あのこは、

あのこは苗床ごと好きなのだ。千誉が。成長して花開き実を結んで、そしてまた芽吹いた千誉が好きなのだ。

妹として、ありがたいのと同時に、鴉同様、柊一郎さえ羨ましくなった。

何しろ姉は一途である。懸命である。

「あたし、三津も大好きよ。」

濁りのない笑顔に、自分も浄化されるから。どうしても、三津は千誉の傍に居たい。誰とどうとなろうとも、千誉は自分と切れない縁があるのだと、言いふらしたくてたまらない。

「そう、三津も好きだから、まあ、あの男でも我慢してあげる。」

少しばかり不服そうに、ガラガラと氷とアイスティーを混ぜ合わせる。

「……姉さん、ヤキモチ？」

「うん。」

だって、

「三津は、あたしの妹なのに。」

自分は絶対の幸福の恋愛をしているわけではない。むしろ、千誉のような恋愛が稀なのだ。

「姉さん、」

「なあに？」

「あたし、最後は姉さんに泣き付くと思うわ。」

だって、多分、彼は、最低だ。

自分を好きなくせに、すぐに夜に溶けようとする。  
だから、

「あたしには多分、姉さんしか残ってない気がするの。」

最後の最後には。

「良いよ。」

笑んで、千誉は三津の髪を撫でた。

「三津は思い切りぶつかって来れば良いよ。」

好き、の塊をもって。

「それが毀れたら、あたしがアイツを泣かすから。」

あの頑健な男をどうしたら泣かせることができるのか。こうなつては、悩むところはそこだけだ。なんといつても、落ちた先には姉というクッションが有る。三津が毀れる事なんてありえない。

「うん、そうする。」

良く似ている、と言われる面差しで、三津は姉に髪を梳かれる感触を味わった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4018ba/>

---

Lace Edge

2012年1月10日17時48分発行